

# 化学教育 徒然草



## — 学力を支える探究に —



MURAKAMI Tadayuki

村上 忠幸

京都教育大学 名誉教授

少し昔の話になるが、1996年3月に「クラブ活動および教材開発を通じての化学教育への貢献」が評価され、化学教育有功賞を受賞した。当時の最年少であった。4月、兵庫県立姫路東高等学校3年生理系クラスを担当した筆者は、あることを思いついた。それは課題研究の実施である。科学クラブの指導で培った探究活動の指導力を試してみること、また、時代は着実に探究に向かっていたことが背中を押した。3クラス、30班の課題研究が始まった。週3回、1クラスにつき放課後2時間、化学室は生徒たちの実験で熱気にあふれた。7月、学校向かいの姫路城城郭センターで1日かけて発表会を実施した。生徒たちの発表は見事で、聴衆も熱心に聞き入った。大成功であった。これを聞きつけた先生方からノウハウや理論を求められた。ただ、筆者は「生徒と教師が頑張る」としか言えなかった。このフラストレーションが大学での探究学習の理論化に向かう大きな原動力になった。2002年、SSHが始まる6年前のことであった。

その後、1999年4月に京都教育大学の助教授として着任した。そして、話は一気に2025年3月、「化学教育から理科教育へ広がる探究学習の発展への貢献」というタイトルで化学教育賞をいただいた。高校教員になってからの探究（探究学習、探究活動、課題研究等）の日々は、40年にもなる。「カラスの鳴かない日はあっても、村上が探究と言わない日はない」と探究のことばかり考えてきた。

今その広がり、化学教育から理科教育、そして教師教育に及んで新展開へと向かっている。その行方には、探究学習を日本の強みを生かして実現していく視点がある。それは「伝統的な教育（学力を重視した共同的学び）と新しい教育（探究を重視した個別的学び）を車輪の両輪と見る視点」である。今、日本では、このような視点での混乱が生じている。それはこの両者が二項対立的に批判しあったり、その良さを弱めあったりして、バラバラでつながっていないことに原因がある。今こそ「学力が大切、探究はそれを支える」という認識にあらためて立つべきときである。これまで自由で協働的な探究を謳っていた筆者が「学力をきっちりして、そして探究を」と言い始めていることに違和感をもつ読者も多いことだろう。ただ、筆者が言い始めた重みのようなものも感じていただきたい。

[連絡先]

612-8522 京都府京都市伏見区深草藤森町1（勤務先）